

南平高校演劇部では、7月31日(水)から8月2日(金)、「令和6年度インクルーシブ体験プログラム事業」(教育庁地域教育支援部生涯学習課支援事業)として、NPO法人「PAVLIC」と連携して、プロの演劇アーティスト6名を講師に招いて3日間のワークショップを行いました。

1日目は、講師の自己紹介の後、インクルーシブ体験の目的を、「様々なハンディキャップや文化的背景を持つ人を含めて市民が多様な人と一緒に社会を築き営んでいくことの意味を考えてほしい。そのために今回は高齢者と出会う体験をしてもらい、そこで感じたことや考えたことを演劇を使って振り返るという内容のワークショップを行います」とみんなで共有。ジェスチャーゲームなどのアイスブレイクの後、3チームに分かれて、アーティストの高校時代のエピソードを聞いて、その中から印象に残ったシーンを生徒が演劇に創作して再現・発表・共有しました。

2日目は、高齢者介護施設「カノン調布」を訪問しました。利用者さんと一緒にじゃんけんやジェスチャーゲームをした後、5人程度のグループに分かれて、利用者さんとの会話の時間を過ごしました。ほとんどの生徒は、普段高齢者と一緒に生活しておらず、不安やとまどいがあったようですが、ホスピタリティを持って、一人一人の高齢者に向き合っていました。

3日目は学校で、3チームに分かれて、前日のカノン調布で体験したことを生徒一人一人が他の生徒に伝え、その中からエピソードを選んだりつなぎ合わせたりしながら演劇にして再現・発表・共有し、その後数名に分かれて言葉による振り返りをしました。一見和やかにみえた会話の場面にも、実際には話がかみ合わず困っていたり、気まずい沈黙の時間にどうしようかと焦っていたりする様子が、演劇で再現されました。それによって、当日は目の前のことに必死で気づけなかった感情や思考が可視化され、共有され、深い振り返りにつながりました。生徒の振り返りの中からは、「高齢者という言葉でひとくくりに言われることが多いけれど、実際には一人一人の個性と人生経験をもったいろんな人がいることに気づけた」などの感想が聞けました。

演劇を使うと、一人一人の具体的な身体と言葉を通じて他者と関わるために、耳が遠かったり、うまく歩けなかったり、スムーズにしゃべれなかったりしても、その人なりの在り方、存在の仕方として相手を認めリスペクトできる回路が開かれやすいのだと感じました。そのことは、高齢者を相手にする場合だけでなく、ワークショップ期間中ずっと生徒と生徒、生徒とアーティストとの間にも同じようにみられました。

ワークショップの写真です。



(演劇部顧問佐々木宏)